



TITLE:

京大広報 No. 409

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 409. 京大広報 1991, 409: 87-102

ISSUE DATE:

1991-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209261>

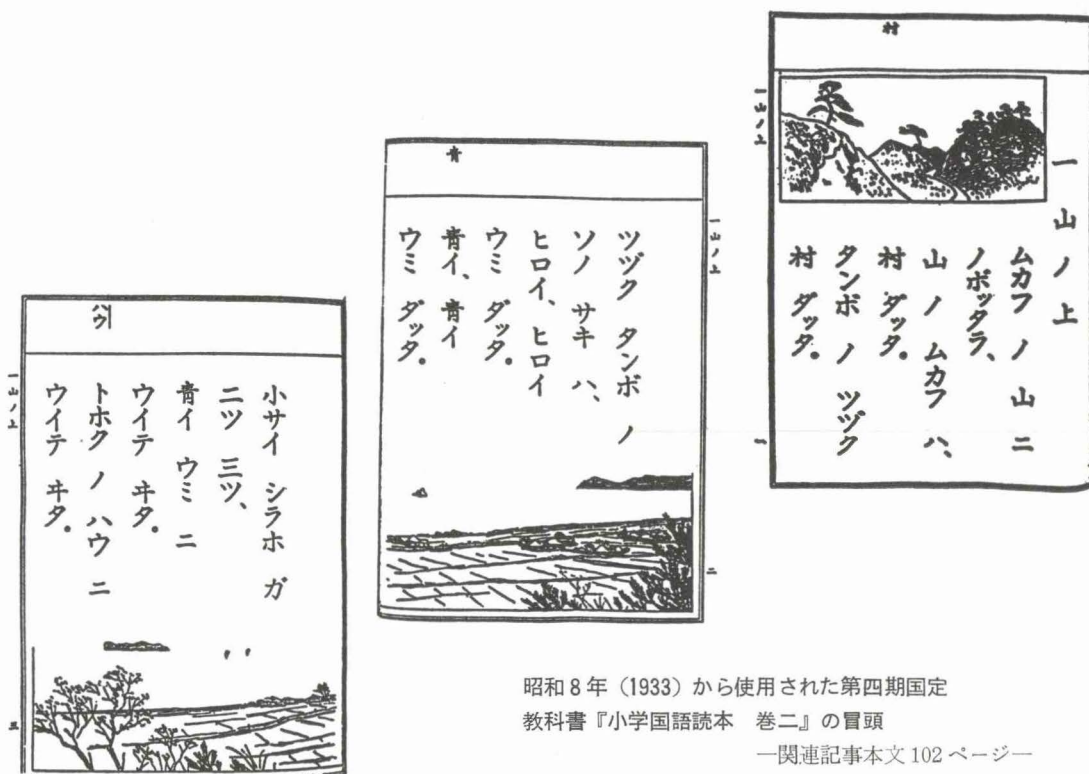
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 409

京都大学広報委員会



昭和8年(1933)から使用された第四期国定

教科書『小学国語読本 巻二』の冒頭

—関連記事本文102ページ—

## 目次

修士学位授与式における総長のことば	88
卒業式における総長のことば	90
<保健コーナー>	
VDTによる健康障害 (テクノストレス)への対応	96
<紹介>	
情報処理教育センター	97
<資料>	
平成2年度京都大学後援会助成金交付者	98

計報	100
<随想>	
日本のペプチドおよびタンパク質化学 名誉教授 矢島 治明	101
<コラム>	
思い出の教科書 教育学部教授 稲葉 宏雄	102

## 修士学位授与式における総長のことば

平成3年3月23日

総 長 西 島 安 則

新修士諸君、おめでとうございます。

本日ここに、元総長 奥田 東 先生の御臨席を賜わり、各研究科長、部局長の先生方、教職員の皆様と共に、平成2年度修士学位授与式を挙行し、文学研究科64名、教育学研究科16名、法学研究科22名、経済学研究科17名、理学研究科182名、薬学研究科38名、工学研究科581名、農学研究科140名、合計1,060名の諸君に京都大学修士の学位を授与いたしました。

昭和28年（1953）に、本学に新制度による大学院修士課程が設置されてより38年が経ちました。昭和30年（1955）3月の第1回の修士学位授与式におきまして、285名の京都大学修士が誕生しましてより、本日の新修士諸君を加えて、これまでに27,070名の修士の諸君を本学は送り出すことができました。

わが国の高等教育・学術研究の場に定着し、かくも充実しました修士課程の重要性は、今さら申すまでもありません。わが国の戦後の復興とその後の社会の着実な成熟への道における、歴代の修士諸君の活躍と、国際的な貢献は誰もが認めるところであります。学問への情熱に満ちた、これほど高い水準の本学の大学院修士課程は、世界の学界において極めて高い評価を受けています。これだけの実績を基盤にして、将来のために大学院における教育研究環境を抜本的に改善することは、今や国家の緊要な急務であります。近時、わが国の文教政策についての論議において、活性化、高度化が唱えられておりますが、現に、学問的情熱・活力に満ち満ちて、国際的にも極めて高い学問水準をもち、今日ここに集まった諸君のような俊才を年々送り出している大学院にこそ、まず教育研究環境の抜本的な改善を実施すべきです。長期的観点に立った学術振興こそが、国際社会、人間社会の将来へのわが国の真の貢献となりうるものであると信じます。

諸君を2年前の春大学院の修士課程に迎えたときの大学院入学式（平成元年4月11日）におきまして、私は、清風荘の庭の作者小川治兵衛の作庭のことを話し、ひとりの人間の成熟と伝統についての思いを語りました。そして、「これから、研究を通して自分を見つめ、人生を楽しみ、歴史を味わい、自らの成熟が実感できるような充実した大学院学生生活を送ってほしいと思います」と、歓迎の辞を結びました。それから、早や、2年経ちました。そして、今朝、諸君の門出のときを迎えました。

私は諸君への餞の言葉として、“激動のときにこそ、不動の心を”と言うことばを贈りたいと思

います。

この2年間、世界の情勢は、大きく動いてきました。“激動の時代”とか“地殻変動”といった表現が、しばしば使われています。ヨーロッパでも、アジアでも、アフリカ、中南米、そして中近東でもこれまでの体制から、新しい秩序への苦闘が繰返されています。一つのトリガーが、いま一つのトリガーを誘発し、それが、また別のトリガーと連動するといった具合に、これらの変動を惹起する内部エネルギーは、深いところで広く連なっているように思われます。一つ一つの事態の推移は、他の地域での情勢を受けて、さらに増幅されます。その中では、緊急な、いわゆる危機管理の対処も必要でありましょう。しかし、そうした短期的視点の議論が、“民族の歴史”や“地球規模での新しい秩序”といった極めて長期の人類の課題と同じ平面で討論され、いわゆる“正義”の名の下に圧倒的な武力によって処理されてしまうことは、事態をより深刻な混迷に導くもののように私には思えるのです。“激動のときにこそ、不動の心を”と言いましたのは、これからの社会を作ってゆく諸君に、激動への受動的順応能力にのみ気をつかうのではなく、その根底にあるものを見据えて、“何をなすべきか、如何に生きるべきか”を自分の足で立って、考え、表現し、行動してほしいと思うからであります。それが知性というものであると思います。激動の時ほど、過去が現在に顕われ、また、現在から未来が望めます。そして、その時こそ真の知性が求められる時であります。今ほど一人ひとりの知性が大事なことはありません。

随分以前のことでありますが、私はこんな体験をしました。遠泳をした時です。海は荒れ模様でした。長時間泳いで目的の岬に近づいていました。波の底にあるときは、まわりはすべて水の壁に囲まれますが、時に波の頂に体が浮き上がった時に、岬が見えるようになりました。そちらへ波に身をまかせながら泳いで行きますと、足に時々藻のゆらぎが触れるようになりました。あと一息と、力をふりしぼって、波に押され岬にいよいよ近づくと、足の先が確かに海底の砂に触れました。やがて水の中で立つ事が出来た時、その海底に立った足の感触は強い感動を伴って、全身に伝わりました。その感動は強烈なものでした。幼いときに受けた感動が無意識のまま脳裏に深く刻み込まれており、それがその時の刺激で急に意識の中に顕われたのかも知れません。岸边について、水の中では立っていたのに、全く立てない事に気付く四つん這いになって追って来る波を逃れて砂の坂をのぼり、やっと二本の足で立って、波打ちぎわから泳いで来た遠い海を眺めた時の何とも言えない爽快さは忘れられません。

かえり見て、私はまだ、“僕の前には道はない、僕の後ろに道は出来る”などと言うことは出来ませんが、しかし、若い時のその感動を持ちつづけ、自分の足で、学問の道を歩みつづけて来ました。その道すがら会った友人達、そして、その道を歩みながら眺めた学問と人間の歴史の風景、楽しい道程はまだまだ遙かにつづきます。

たいへん個人的な感慨を述べましたが、これから出発される諸君に、自分で何をなすべきかをしっかりと考えて、自分の“不動の心”をもって激動の中でしっかりと歩んでくれることを心から念願します。“激動のときにこそ、不動の心を”という 餞の言葉をもって私のお祝いの辞を結びます。



## 卒業式における総長のことば

平成3年3月25日

総 長 西 島 安 則

諸君、卒業おめでとう。

本日ここに、元総長 奥田 東先生、そして、田中周友先生はじめ多数の名誉教授の先生方の御臨席を賜わり、部局長の先生方、教職員の皆様と共に、平成2年度の卒業式を挙行し、文学部213名、教育学部68名、法学部384名、経済学部263名、理学部287名、医学部117名、薬学部72名、工学部941名、農学部308名、合計2,653名の諸君に合格証書を授与することができました。これは、本学の最も大きな喜びであります。

京都大学は、明治30年（1897）に創設されて以来、94年間、世界の中の学問の府として成熟し、今日に至りました。その間、旧制時代に49,712名の卒業生を送り出し、そして戦後、新制度になりましてから、本日の81,582名の卒業生を送り出すことになりました。創立以来、本学の卒業生は合わせて、131,294名となりました。

今日、自信に満ちた輝かしい眼をもった意気盛んな諸君の卒業を祝うことは、本当に嬉しいことであります。これまで諸君の学習の年月を支えてくださった御家族の皆様、諸君の成熟の一步一步を導いてくださった先生方、共に励まし合い諸君の日々を楽しく深みのあるものとしてくれた友人達、そして、諸君のお世話になった総ての方々に、ここで諸君と一緒に心から感謝したいと思えます。

今日は、卒業生を送るに当たり、これから社会のいろいろな分野で活躍をはじめめる諸君、あるいは、学問研究の世界に研究者として第一歩を踏み出す諸君、自分で考え、自分で歩き、自分の人生を生きる諸君に、「孤独」ということについて少し話したいと思えます。

“孤独は、人のふるさと”，また，“孤独とは生きることの本質的な地盤である”と言われます。ここで私の話そうとする「孤独」というのは、受身の立場での「孤立」ではありません。孤独というのは、一人ひとりが自分自身をしっかりと見つめ、自分自身の目で周りを見て、人生を生きつつ自分を創るなかで、独自の激しい意志を内に燃やしている状態であります。

今、世界は「地球の時代」と呼ばれるほど、人間社会での人々の相互依存が強くなっております。人と人との関係、まちとまちとの関係、国と国との関係、民族と民族との関係、全ての意味において、この地球上の人間社会の一員ということを意識しなければならない時代になっております。しかし、それと同時に、それぞれの文化から一人ひとりの個性に至るまで、その独自性を意識し、表現する、「個性の時代」でもあります。普遍性（Universality）と多様性（Diversity）とが、あらゆる立場、いろいろの局面で重要な課題として論じられています。

力による抑圧によって保たれて来た一つの体制が、独自性の主張、独立という意識をもって、より活気ある新しい秩序を求める動きによって激しく揺れています。そしてそのことが、新しい安定の枠組みを模索する、より現実的で多様な動きにもつながっています。歴史は連続の中の一つの節目を迎えつつあるように見えます。ここで大事なことは、孤独についてのしっかりとした意識を自分のものとして身につけることです。それは全体のつながりの中で自分というものを持ちつづける勇気であります。

孤立するのが恐ろしくて、何も言えない何も考えられないというようなことでは、将来に理想を生かそうとする意欲、すばらしい世界を創ろうとするお互いの成熟した協調は生まれません。それぞれが孤独に耐える勇気を持って、自分の考えを力強く表現し、それが集まってこそ、一つの民族としての独立もあり、一つの国としての理念も生まれ、新しい世界への道が拓けてくるのであります。京都大学の自由の学風を身につけて、これから第一歩を踏み出す諸君に、ぜひこのことを考えていただきたいと思います。

17世紀の後半からのヨーロッパは激動のときでした。その中でジャーナリスト、経済人、政治運動家として、苦難の時代、激しく揺れ動く英国の社会を多彩に生きたダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660~1731) が、1719年、今から272年前に、『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』(*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*) という物語を書いて出版しました。このデフォーの生涯の背景にあったその頃のイギリスの宗教的、政治的、社会的な混乱や苦難、あるいはヨーロッパを中心とした世界の胎動が、彼をしてこの物語を書かせたのだと思います。

イギリスでは、16世紀の初頭に絶対主義体制が確立しました。エリザベス一世 (Queen Elizabeth I, 1533~1603) の在位 (1558~1603) の時代は絶対主義の最盛期であるとともに、イギリスの国運の隆盛期でもありました。紛糾していた宗教問題にも一応の解決を見ましたが、執拗な経済不況を乗り切るために海外に発展し市場を拡大することが不可避でありました。1600年には、東インド会社 (East India Company) が設立され、女王はそれにインド貿易の独占権を与えました。この間に、ロンドンが人口が倍増して、20万人の大都市となり繁栄しました。

王政と社会の矛盾は、エリザベス一世の治世の晩年から次第に激化して、1640年代に入り、ついに清教徒革命 (Puritan Revolution) が起こりました。ロンドンに本拠を置き、東部・南部の大商人、進歩的ジェントリーを中心とした議会派 (主として清教徒) と、北部・西部の貴族、保守的ジェントリーを中心とした王党派 (主として国教徒) が対立して市民革命が勃発し、国王の絶対主義的権力は打ち破られ、1649年、国王チャールズ一世 (Charles I, 1600~1649) は処刑されました。しかしながら、この市民革命の結果、革命派によって王党派の土地は没収され売却され封建的勢力の基盤は破壊されましたが、それを買いてとって大商人やジェントリーは所有地を増大させ、地主と農民との間の封建的関係はそのまま残りました。

チャールズ一世の処刑後成立した共和制のもとで政権を握った独立派は、民衆運動を弾圧する一方、古い勢力と妥協して保守化し、国民の間に不満が高まり、王政の復活を望む機運が次第に強くなりました。清教徒革命に敗れ、フランス、オランダに9年間亡命していたチャールズ二世 (Charles II, 1630~1685) は、1660年になって王政復古の機が熟すると、「ブレダ宣言」 (Declaration of Breda) を発して、議会の尊重や信仰の自由を約束して帰国し、王政復古が実現しました。

デフォーがロンドンに生まれたのは、この年です。チャールズ二世は帰国後、「ブレダ宣言」を破る政治を強行し、反動的専制的態度に出て、再び、議会を刺激しました。政治の混迷、宗教の対立、社会の不安がまた拡がる中で、1665年にはロンドンは史上最大のペストの流行にみまわれ、7万5千人もの死者が出て、多くの市民は難を逃れて市を離れました。その翌年1666年の9月のはじめには、ロンドン橋の近くのベーカリーからでた火が、ロンドンの大半を焼きつくす大火となり、1万3千戸の家屋が灰燼に帰しました。これらの事態は、幼いデフォーに強い印象を与えたものと思われます。

名誉革命 (Glorious Revolution) によってジェームス二世 (James II, 1633~1701) がフランスに亡命させられたのは、1688年、デフォー28歳のときでした。その後の立憲体制は次第に固まり、神聖なる王権の時代から近代化へと、歴史の流れはやがて、激流が岩を噛む革命の世紀へとさしか

かって行くのでした。そういう時代の渦の中で、実業家として、また、ジャーナリストとして精一杯生き抜いていたデフォーは、非国教徒（Dissenter）の立場を貫いていました。彼が42歳のときに書いた *The Shortest Way with the Dissenters* は世の中の物議を醸し、彼は牢につながれることになりましたが、これがデフォーの作家としての道をひらいたとも言えましょう。『ロビンソン・クルーソー』を書きはじめたときは、もう60歳近くになってからでした。

この物語を読まれた諸君も多いと思います。父の忠告に背いて家を出て冒険の旅に立った若いロビンソン・クルーソーの乗った船が難破し、唯一人で絶海の孤島の砂浜に漂着します。そして、その無人島で孤独の苦しみを味わいながら、自然の中に身を委ね、合理的な計画を立てて28年間営々と働き自分一人の王国を建設します。しかし、終には迎えの船が来て故郷の人間社会に帰り物語は終わっております。その中で何が語られようとしているのかは、それを読む人によって、またその時代の背景によって、いろいろに読み取れます。確かにこれほど多くの人々に影響を与えた物語も少ないと思います。皇帝の時代から革命の時代へと、17世紀から18世紀に移る過程にあったヨーロッパで、そして、19世紀日本の近代化の道においても、多くの人々に強い影響を与えた本であります。私は、その物語の主題は「孤独」であると思います。そこには、近代的人間の原形があるとも読めます。

デフォーは、この物語の第3部に当たる『ロビンソン・クルーソー反省録』（*The Serious Reflections of Robinson Crusoe*, 1720）において、

「……たしかに私は、孤島で28年間も孤独な生活を享受したといえる。しかし、こうやってものを書きながらも、世界中でも一番群衆の集まっている都会、つまりロンドンの真っ只中において、私が現在享受している孤独は、はるかにそれ以上のものなのだ。」

と、ロビンソン・クルーソーに言わせております。この冒険物語は、絶海の孤島という舞台において、近代化の入口に立った一人の男の孤独を掘り下げ、語らせたものであります。

「……さらに、ひとしきり走ると、もう陸地だった。すっかり喜んで崖によじのぼり、草の上に腰をおろした。波はここまではもうやってこなかった。」

こうして、ロビンソン・クルーソーの孤島でのただ一人の生活が始まりました。しかし、作者は、彼を自然の中に全く置き去りにはしませんでした。野生にはかえることのできない近代的人間の宿命を負っている彼に、生活上の最小限の道具と、相手を殺すことによって“正義”を行う武器を与えました。多少の不自然をかまわず舞台装置を加えたのです。

「……船はまだ沈まずにまっすぐにうかんでいるようすであった。船に行けたら、少なくとも必要な手廻り品が手に入るのだがと思った。……本船が沈まないであのままの姿でまっすぐ海上にある間は、もってこられるものなら一切合財もってこなければならぬと私は思った。……」

「必要な物質を確保したいという欲望が、他の場合にはとても考えられないことをする勇気を私に与えたのだった。……何が一番必要かとよく考えたあげく……三つの箱のうち、最初のものには食料品をつめた。……衣類も必要だが、ほかにもっと手にいれたいものがあつた……陸地でまず必要な道具類などがそうだった。……次にほしいものは弾薬と武器だった。」

彼は、一人で島の上での生活の基礎を築き始めるのですが、まず孤独に堪えねばならなかったのです。

「……沖を通る船を見つけられるものならと思い、小高い山の頂上にいって海上を見回したい気持ちを自分でどうすることもできなかった。頂上に登ってみているとずっと遠方にたしかに船影を認



めたような気がして、小躍りして喜んだ。なおその影をみていたがしまいにはほとんど眼がぼんやりしてきて、最後にはすっかり見えない、しまいには地上に伏して子供のようになだ泣くのみであった。」

そしてまた、彼は思索にふけります。

「自分があきるほど今まで見てきたこの大地と海、いったいこれはなんなのであろうか。……生きとし生けるものはみななんなのであろうか。またどこからきたのであろうか。いうまでもなく、われわれはすべて、ある秘められた<力>によって、大地と海、大気と青空を作った<力>によってつくられている。だがその<力>はいったいなにものなのだろうか。」

島での生活の基盤を固めて、あるときただ一人の島をめぐる、彼は次のようにも思うのです。

「なんとも言えないひそやかな喜びの情がふつふつとわいてきた。これはみなわたしのものだ、わたしはこの国の侵すべからざる王であり支配者なのだ、わたしの所有権は誰がなんといおうと絶対なものだ、という思いがした。」

ただ一人営々として生活をきりひらき、ものを作り、喜び、悲しみ、祈り、呪って、日々を送るロビンソンは、やがて、自然の驚異よりも、何よりも、人間を恐れる人間となって、彼はある日海岸で人間の足跡を発見しました。

「……砂の上に紛れもない足跡が一つはっきりと残されているではないか。私は棒立ちになったままたちすくんだ。まさしく青天の霹靂であった。……混乱に混乱しきって気が変になった男みたく、さんざんわけのわからないことを考えたあげく、私は自分の要塞に帰った。……ただ心の底までおびえきってしまい、……いかにとりともめもない妄想が次から次と私の頭脳をかすめ去っていったことか。」

「私のただ一つの苦悩は、人との交渉から絶縁されているということであった。はてしない大海原にかこまれ、人間の世界から遮断され、私のいわゆる沈黙の生活に運命づけられて、ただ独りであるということであった。……ところが、その私が今や人間にあうかもしれないという不安に恐れおののいているではないか。一人の人間がこの島に足跡を印したというその影におびえ、その無言の姿におびえて今にもくずれそうな有様ではないか！」

それからあとの彼の島での生き方は、もはや、孤島での自然の中の聖人への道ではなく、18世紀のヨーロッパ社会の俗人たちの縮図がこの小さい島の中で繰り広げられるのであります。

『ロビンソン・クルーソー』が出版されてから、約40年後にジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) は『エミール』(Emile, 1762) に次のように書いています。

「わたしたちにはどうしても書物が必要だというなら、わたしの考えでは、自然教育のもっともよくできた概説を提供する一巻の書物が存在するのだ。……そのすばらしい本とはどんな本なのか。アリストテレスかブリニウスかビュフォンか。いや、ロビンソン・クルーソーだ。……」

「偏見のうちから、物事のほんとうの関連にもとづいて判断を整理するもっとも確実な方法は、孤立した人間の地位に自分をおいて考えてみることだ。……」

「自然的な技術は一人の人間で十分にできることだが、それをやっているうちに、多くの人の協力を必要とする工業的な技術が求められる。孤独な人間でも自然的な技術は持つことができるが、工業的な技術は社会においてのみ生じてくるもので、社会を必要なものとしている。……」

ルソーも、この『ロビンソン・クルーソー』には近代の人間の原形があると言うことを書いておられます。近代化とはどういうことだったのでしょいか。

日本の幕末、ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794~1858) 来航の数年前、江戸に遊学中の



黒田麴廬(1827～1892)が、オランダ語訳の『ロビンソン・クルーソー』全巻を読み、それを抄訳して『漂荒紀事』と題しました。嘉永3年(1850)、黒田23歳の年であります。それは、この物語のわが国で初めての翻訳でありました。

黒田麴廬は、文政10年(1827)に膳所藩校遵義堂頭取黒田扶善の次子として生まれました。名は行、または行元、通称行次郎、字は大道と称しました。酒をよく嗜み、後に麴廬と号しました。彼は天保14年(1843)、17歳の時、父命により大坂の緒方洪庵(1810～1863)の適塾に入門いたしました。適塾が開かれてまだ間もない頃でした。しかし、膳所で攘夷論が盛んになり、蘭学の勉学を一時断念せねばならなくなりました。緊迫した社会の情勢下で、再び蘭学の修業を志し、嘉永元年(1848)に江戸への遊学を決意しました。

それまでの日本における蘭学は、実用の学として、天文・地理や兵書、また、医学書が多く翻訳され活用されてきました。幕府もその限りにおいてこれを認めていました。しかし、蘭学を通じて蓄積された海外事情についての知識は、実用の学にはとどまらず天下の政策にまで影響を与えつつありました。ヨーロッパの列強が競って貿易を盛んにし国の富を増やし、武力を強化して植民地政策を進め、市場を独占しようとする17世紀以降の勢いはアジアに及び、特に、阿片戦争(1839～1842)によるイギリスの中国侵略は、識者に強い危機感を与えていました。蘭学は単にヨーロッパの科学技術を学ぶためではなく、各藩独自の富国強兵の指針となり、西洋事情の情報収集の窓となりました。それは、各藩の幕府の統制からの離脱の動きにつながりました。力による統制が弱体化するとき、昔も今も、それを止めようとする最悪の方法は、情報の制限と弾圧であります。田原藩の家老の渡辺華山(1793～1841)や蘭学者・博物学者の高野長英(1804～1850)らが「蛮社の獄」によって投獄されたのは、天保10年(1839)でした。華山は蟄居の判決を受け、2年後に自殺に追い込まれ、長英は永牢となりましたが、6年後脱獄して潜伏、弘化4年(1847)に『知彼一助』(彼ヲ知ル一助)を著しましたが、幕吏に追われ再び潜行して嘉永3年(1850)について自殺しました。若い黒田麴廬が『漂荒紀事』を書き上げたのはその年でした。

幕府は、その嘉永3年9月に、「近年妄りに奇説を翻訳して俗耳を驚かす者がいるが、今後は厳しく吟味を加える」という禁令を出しました。彼はこのような社会状況の下で、やむなく、『漂荒紀事』を匿名にしました。もちろん公の出版は出来ません。しかし、彼の原稿は幾多の写本となって世に広まり、多くの読者を魅了しました。新島 襄(1843～1890)もその一人で、彼はこの本を読んで決意し元治元年(1864)に密出国してアメリカへ渡りました。

京都大学附属図書館には、安中候板倉勝明所蔵本を書写した写本全3巻があります。また、黒田家から寄贈された草稿三巻本も蔵されています。これらは、この度、黒田麴廬についての研究成果とともに京都大学学術出版会から出版されました。特に推敲・添削を重ねた草稿は、風雲急な世にこの名訳を送る著者の気魄が直に伝わって来るのを感じます。

彼は蘭、英、仏、独、梵語を学び、著書や訳書が約110種もあり、36歳のときから3年半の間、幕府の開成所の教授も勤めました。彼の博学には、後に福澤諭吉(1835～1901)をして、「今日に於て恐るべき事は、ただ一の黒田麴廬あるのみ」と言わせたと言われています。

黒田麴廬は、明治維新(1868)のときには41歳ですが、官に就かず故郷で学究の徒として過し、明治25年(1892)に66歳で没しました。幕末から明治へ、激動の時代を優れた識見をもって学問に打ち込み、それだけにまた、学問への政治権力の介入について厳しい経験を重ねた彼が、新しい権力の中核に学識をもって加わることなく、己の一生を全うしたのは、あるいは、若い時に熟読し翻訳した『ロビンソン・クルーソー』の中に、彼もまた彼自身の孤独の道を見出したからかも知れま

せん。

今の時代に孤独というもの、自分自身というものを見つめるということ、世の中が激しく動く時にその表面にある激動を追うだけではなく、その底にあるものを自分で見極めること、そして、自分が何を求めて生きるのか、どういう社会を創っていこうとしているのか、そういうことをじっくりと考える自分自身の自覚・意志が大事なことを重ねて思うのであります。そのような一人ひとりの孤独に対する勇気が本当の意味で集まって、そしてよりよい世界ができてゆくのだと私は思います。

今まで、諸君は大学の中でしたばらしい毎日を送ってきました。友人もできました。これから、社会に出ていきます。その時に決して孤独を恐れてはなりません。この時こそ自分というものを持つ勇気を持って欲しいと思います。そしてそれは決して外に対して閉ざされた自分であってはなりません。広い視野と深い思索をもって、自分というものを磨くこと、その中にこそ孤独を楽しみ孤独を自分の生きる基盤とし、それを社会に役立たせる力が、勇気が生まれるのだと思います。

今日、諸君の卒業をお祝いして送り出すに当たり、私は、京都大学の自由な学風の中で学業を終えて、これから出発される諸君が、もう一度これからの自分、これから創ろうとする自分をここで考えて、「これからはじまる」ということを卒業の時に考えてほしいと思います。

諸君、卒業おめでとう。孤独を楽しむ勇気をもって、充実した日々の人生を送って下さい。

#### 参 考 文 献

『ロビンソン・クルーソー』（上、下）、デフォー著、平井正穂訳、岩波文庫、1967、1971。

『エミール』（上、中、下）、ルソー著、今野一雄訳、岩波文庫、1962、1963、1964。

『概説 西洋史』、衣笠 茂・田村満穂・中村賢二郎・廣實源太郎、創元選書、東京創元社、1969。

“The Oxford Illustrated History of English Literature”, Edited by Pat Rogers, Oxford University Press, 1987.

“The Cambridge Guide to Literature in English”, Edited by Ian Ousby, Cambridge University Press, 1988.

『黒田麴廬と「漂荒紀事」』、第1巻『黒田麴廬の業績と「漂荒紀事」』、第2巻『「漂荒紀事」草稿』、平田守衛、京都大学学術出版会、1990。



## 保健コーナー

VDT による健康障害（テクノ  
ストレス眼症）への対応

## テクノストレス眼症とは

Visual Display Terminal (VDT) を使用しながら業務を行う際に、眼・頸肩腕・手指及び精神神経などに異常を来す疾患を VDT による健康障害、別名テクノストレス眼症と定義する。その症状は、VDT 作業中にみられる自覚症状と、VDT 作業の終了後もみられる日常自覚症状に大別される。具体的には、眼が疲れる・肩がこる・いらいらする・頸から肩、腕などへの痛み・眼の痛み・物がかすむ・物が見にくい、等である。

日本眼科医会 VDT 研究班によるテクノストレス眼症の診断基準は次のとおりである。

1. 眼精疲労があること（単なる疲れ眼ではないこと）
  2. 頸肩腕手指などに痛み、しびれ等の異常があること
  3. 精神神経系に異常があること
- 完全型：1, 2, 3 を有する  
不完全型：1 と 2, または 1 と 3 を有する  
疑い：1 のみを有する

VDT 作業では、一日を通して動きの少ない姿勢で仕事を続けることが、頸、肩、背の痛みの訴えと関係し、またスクリーンと資料との間を数多く眼が往復することにより、輻湊・調節・瞳孔系に眼球運動を含めて多大の負荷をかけることが、眼精疲労と関係すると考えられる。ここでは、眼精疲労の予防を中心に考察する。

## テクノストレス眼症(とくに眼精疲労)の予防

## その 1. 適切な矯正

外界の物体の像を網膜上に結ぶために水晶体の厚みを変化させることを調節とよぶ。調節しない状態でピントが遠方に合っている眼（正視眼や遠方用に矯正した眼鏡、コンタクトレンズを使用し

ている眼）では、近業作業時（読書、VDT 作業時）は、調節してピントを合わす必要がある。無理な調節がつづけば、眼に負担がかかり、眼精疲労の一因となりうる。したがって、長時間の近業作業を行う際には、できる限り調節を必要としない状況、すなわち、調節しないでピントが近くに合うようにするのが有利である。具体的には、軽度の近視眼であればもともとピントは近くに合っているのであるから、眼鏡、コンタクトレンズをはずして近業作業をすればよく、それ以外の眼では、適切な近用眼鏡を装用すればよい（読書時の近用眼鏡は眼前 30cm くらいにピントを合わすのが普通だが、VDT 作業用には、50cm くらいにピントを合わす）。眼鏡、コンタクトレンズ等での無矯正例や不適切な矯正例において、自覚症状として認められた VDT 症候群類似症状は、適切な矯正後わずか 3 週間で殆ど消失したとの報告もあり、とくに仕事から長時間の作業を強いられる人で、眼精疲労の強い人は、VDT 作業専用の近用眼鏡を作るのがよい。

## その 2. 小休止の効果

連続作業 1 時間ごとに 10～15 分間の作業休止をとり、一連続作業時間内においても 1～2 回程度の小休止（1～2 分間）をとることが、姿勢の拘束から生じる筋骨格系への負担を軽減させ、また調節機能の低下を抑えて、視覚系への負担を軽減させることが実験的に確認されている。さらに、小休止をとることにより作業能率も上昇することが報告されている。

## その 3. 積極的な眼の安静

VDT 作業後の調節反応速度の低下に対する安静効果の実験によれば、自然視に比較して閉眼や遠方視など積極的に眼の安静をはかったほうが回復のはるかに早い。したがって、作業時約 20 分間隔で視線を近距離から離して、数分間遠方をみる、さらに 1 時間ごとに 10～15 分間の作業休止をとり、その間積極的に眼の安静をはかることにより、作業者の視覚系への負担を軽減させて眼の蓄積疲労から生ずる病的訴えを解消し、能率の良い仕事が継続できる。

（保健診療所 竹内 篤）



## &lt;紹介&gt;

## 情報処理教育センター

情報処理教育センター（以下センターと略す）は、昭和53年4月に設立され、学内の一般情報処理教育のための学内共同利用教育研究施設である。本センターはそれまでの学内計算センターを改組拡充し、本部構内の工学部1号館内に設置され、学内の地理的中心、利用の重心に位置している。現在職員は、センター長（工学部：山田善一教授）のもとに、専任教員3名、技官1名、事務官2名、その他非常勤職員を含め10名余の部局である。本センターの主たる業務は、

- (1) 学内一般情報処理教育用の計算機システムの管理・運用
- (2) 情報処理教育に関する共通の・基礎的な教育の実施
- (3) 情報処理教育に関する研究並びに開発

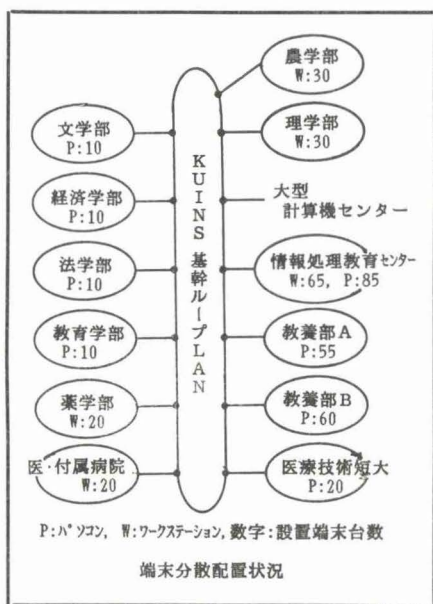
などである。

センター設立以来、TSS（タイムシェアリング・システム）を主体に置いて運用しており、これまでに数度の機種更新を行い、今年3月にも機種更新を行ったところである。

今回の機種更新の特徴は、これまでの端末装置の分散配置（理、医、薬、農の各学部並びに教養部、医療短大）の他に新たに文、教育、法、経済の各学部にも端末を分散配置したことである。ホスト計算機（日立M680/180E）の処理能力は、ほぼ従来と同じであるが、センター内及びセンター外に配置した端末装置425台は、それぞれの学部の要望に沿って、32ビットのパソコンあるいはUNIX系のオペレーティングシステムで稼動するワークステーションを導入し、図に示すように工学部を除く全学部で端末を分散配置した。各部局の分散配置端末群とセンターとは、京都大学統合情報通信システム（KUINS）の基幹ループLANを経由して接続されており、全ての端末装置から本センターのみならず、大型計算機センターへの

アクセスも可能となるなど、高度な計算機利用環境を整えるに至った。

また将来、学生によるセンターの利用は、授業の利用のみに留まらず、電子メール、電子掲示板の利用に代表されるような広範囲な情報通信の手段として活用されることを想定し、全学部の協力のもとに利用者番号の一元化を計った。これにより、学生は在学期間中、学生証番号でセンターの計算機システムを利用できるようになったことも特徴の一つであろう。



センターは、現在、全学部の授業で利用されており、年間の利用科目数は119科目となり、利用学生は延べ約6,800名に達している。また、今年度からは教養部の授業利用が倍増することが確定している。しかしながら、全学部にもれば依然として理工系学部からの利用が多いが、この度の文科系学部への端末配置により、当該学部からの利用が増すものと期待されている。

センターでは、文科系学部学生を対象とした、情報処理の基礎的な講義と、学部からの講師に依頼したオムニバス形式の応用的な講義を開講し、さらに両科目とも後期に演習科目を設け、計4科目を開講している。ただし、取得した単位の認定については、受講学生の所属する学部の判断による。

KUINSを始めとする、学内のネットワークの整備と、高機能ワークステーションの普及とあいまって、学内からの高度な計算機利用が増しており、この傾向は、各学部の授業利用にも反映されてきている。したがって、センターとしては、学内の授業担当教員並びに研究者の要望に沿った、新しい計算機利用環境の整備を主体とした教育活動の支援に力をそそぐとともに、情報処理を専門としない学生に対するいわゆる一般情報処理教育をさらに推進していく必要があると考えている。

（情報処理教育センター）

## ＜資 料＞

## 平成2年度京都大学後援会助成金交付者

京都大学後援会助成事業検討委員会で決定した平成2年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付者は、第1種（海外派遣研究員）27名、第2種（海外からの学者招へい）13名、第4種（大学行政上の渡航）9名、（大学間協定校との交流）2名で、それぞれ次のとおりであった。

## 1. 第1類第1種（海外派遣研究員）

本学教員が、専攻する学問分野等について調査、研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当、宿泊料）を交付するもので、派遣区分は、6か月、3か月、1か月、若手研究者（概ね1年）がある。

派遣区分	所 属 部 局	職 名	氏 名	派 遣 国	研 究 題 目
6か月	経 済 学 部	教 授	下 谷 政 弘	アメリカ合衆国	戦時期日本企業の軍需生産・管理機構の研究調査
	薬 学 部	助教授	渡 部 好 彦	フランス	インターフェロンの生理的機能に関する研究
	防 災 研 究 所	助教授	江 頭 進 治	アメリカ合衆国	土砂水理学に関する研究及びアメリカ合衆国における河川水理学の現況調査
3か月	医 学 部	助 手	松 木 優 典	スウェーデン	顎顔面インプラントに関する研究調査
	教 養 部	教 授	山 田 稔	フランス	現代フランス語語彙研究及び現代フランス小説の現状調査
	医 療 技 術 短 期 大 学 部	教 授	松 本 雅 彦	フランス・オーストリア	青年期精神障害とくに神経症性性格障害の調査研究
	経 済 研 究 所	教 授	上 原 一 慶	中華人民共和国	中国における経済改革の実態調査
1か月	文 学 部	助教授	徳 永 宗 雄	オーストリア	国際サンスクリット学会出席・発表
	教 育 学 部	教 授	坂 野 登	アメリカ合衆国・カナダ・連合王国・ドイツ民主共和国	大学における専攻領域とラテラリティの関係に関する国際比較
	経 済 学 部	教 授	西 村 周 三	スイス・ドイツ連邦共和国・ベルギー・フランス・連合王国	欧州医療経済に関する研究調査
	理 学 部	助 手	戸 田 昭 彦	カナダ・アメリカ合衆国	高分子に関する国際会議及び高分子物理学に関するゴードン会議出席
	理 学 部	助 手	今 脇 資 郎	オーストラリア	世界海洋大循環の研究
	医 学 部	教 授	藤 田 潤	カナダ	kit プロトオンコジンの機能に関する研究調査
	医 学 部	講 師	三 輪 聡 一	オランダ・スペイン・イタリア	ビオブテリンに関する研究調査
	医 学 部	助教授	巽 紘 一	アメリカ合衆国	ヒト体細胞における突然変異生成機構に関する研究
	医 学 部	助 手	高 木 明	アメリカ合衆国	医療の聴覚障害への対応法に関する調査研究
	医 学 部	助 手	越 村 邦 夫	オランダ・ドイツ連邦共和国・オーストリア	第11回国際薬理学会議出席及び神経科学に関する研究調査
	農 学 部	教 授	岡 村 圭 造	フランス・イタリア・スウェーデン・ドイツ連邦共和国・連合王国	多糖類及びその誘導体の構造に関する研究
	農 学 部	助 手	西 村 勁 一 郎	ドイツ連邦共和国・アメリカ合衆国	農業化学に関する研究調査
	教 養 部	助教授	林 哲 介	ポルトガル・ギリシア・ドイツ連邦共和国	イオン性結晶と混晶における電子励起緩和過程の研究
	原子エネルギー研究所	助 手	伊 藤 正 行	オーストリア・スイス	超微小エアロゾル粒子の成長と動力学に関する研究
	食糧科学研究所	助教授	北 畠 直 文	アメリカ合衆国	食品の品質設計と安全性に関する研究調査
	基礎物理学研究所	助教授	小 貫 明	アメリカ合衆国・イタリア・フランス	各機関の理論家・実験家との討論及び自己の理論に基づく実験についての情報交換並びにゴードン会議における招待講演と討論



派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国	研究題目
1か月	原子炉実験所	助手	芥田敬三	オーストラリア	第4回中性子捕捉療法国際シンポジウム出席及び原子炉医療に関する研究調査
若手研究者	法学部	助教授	洲崎博史	ドイツ連邦共和国	金融機関の規制のあり方
	工学部	助手	高木直史	アメリカ合衆国	高速算術演算回路に関する研究
	人文科学研究所	助手	船山徹	オーストリア	ジュニャーナシュリーミトラの研究

## 2. 第1類第2種（海外からの学者招へい）

海外から学者を本学に招へいし、講義、研究指導等を依頼してその分野の研究発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、招へい期間は原則として1～3か月（一般）及び1年以内（若手研究者）である。

区分	受入部局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研究題目
一般	経済学部	Henri NADEL	フランス・パリ第7大学・助教授	経済学「技術革新と産業構造・雇用構造の変動に関する研究」
	理学部	Innokenty K. Tuezov	ソビエト連邦・テクトニクス地球物理研究所・テクトニクス部長	テクトニクス 日本海、オホーツク海、フィリピン海、テクトニクス
	工学部	Cedo Maksimovic	ユーゴスラヴィア・ベオグラード大学・教授	水理学、応用流体力学、水資源工学、水文学
	工学部	Nicholas C. Handy	連合王国・ケンブリッジ大学・教授	量子化学 電子相関とポテンシャル面に関する理論的研究
	農学部	程志明	中華人民共和国・上海農薬研究所・高級工師	農薬化学 農薬の合成に関する研究
	教養部	Madjit I. Hakki	ドイツ連邦共和国・ベルリン植物園・科学研究員	植物発生学 ウマノスズクサ科及びゲシ科の発生学的研究
	教養部	謝南瑞	台湾・国立台湾大学・数学系、準教授	確率論 Stochastic analysis of random fields
	教養部	Seamus Heaney	連合王国・ハーヴァード大学・ポイリスン修辞学講座担当・英文学教授	イギリス・アイルランド文学(特に詩)
	化学研究所	Torbjorn Norin	スウェーデン・ストックホルム王立工科大学・教授	有機化学 生理活性天然有機化合物の構造及び合成研究
	胸部疾患研究所	Kenneth M. Yamada	アメリカ合衆国・国立衛生研究所(国立癌研究所)セクションチーフ及びメディカルディレクター	分子細胞生物学 「細胞外マトリックス及びそのレセプター」の研究
若手研究者	文学部	金遂	中華人民共和国・中央民族学院・講師	満州族の言語と文化の研究
	理学部	Martin Radvanec	チェコスロバキア・チェコスロバキア地質調査所・研究員	変成岩石学 変成作用の化学反応の解析
	ウイルス研究所	金宁一	中華人民共和国・長春獣医学大学研究所・助理研究員	ウイルス学 ワクシニアウイルスベクターの獣医学への応用

## 3. 第1類第4種（大学行政上の渡航及び大学間協定校との交流）

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めた者の外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所属・職名	氏名	期間	渡航目的国	派遣目的
総長	西島安則	2. 4. 21～2. 5. 4	アメリカ合衆国	全米科学アカデミー年次総会出席並びにアメリカ合衆国における高等教育・研究機関の実情調査
庶務部 広報調査課長	渡部健吉	2. 4. 21～2. 5. 4	アメリカ合衆国	京都大学総長に随行し全米科学アカデミー年次総会出席並びにアメリカ合衆国における高等教育・研究機関の実情調査
総長	西島安則	2. 8. 4～2. 8. 14	フィンランド共和国	IAU第9回総会に出席及びフィンランド共和国における高等教育・研究機関の実情調査



所 属・職 名	氏 名	期 間	渡 航 目 的 国	派 遣 目 的
庶 務 部 国 際 交 流 課 長	及 川 三 千 男	2. 8. 4～ 2. 8. 14	フィンランド共和国	京都大学総長に随行して IAU 第9回総会に出席並びにフィンランド共和国における高等教育・研究機関の実情調査
庶 務 部 国 際 交 流 課 長 第 二 渉 外 掛 長	貝 塚 唯 生	2. 8. 4～ 2. 8. 14	フィンランド共和国	京都大学総長に随行して IAU 第9回総会に出席並びにフィンランド共和国における高等教育・研究機関の実情調査
総 長	西 島 安 則	2. 9. 19～ 2. 9. 27	ドイツ連邦共和国	ドイツ連邦共和国における高等教育・研究機関の実情調査及び大学間学術交流に関する打合せ
経 理 部 経 理 課 長	田 口 禎 之	2. 11. 15～ 2. 11. 26	タイ シンガポール インドネシア	東南アジア諸国における大学運営及び施設に関する実情調査並びに京都大学東南アジア研究センター連絡事務所の管理状況等視察
総 長	西 島 安 則	3. 2. 1～ 3. 2. 10	スイス連邦共和国	ワールド・エコノミック・フォーラム・ダボス会議出席及びスイス連邦共和国における高等教育・研究機関の実情調査
基 礎 物 理 学 所 授 研 究 教	牧 二 郎	3. 3. 19～ 3. 3. 25	アメリカ合衆国	総長代理としてアメリカ合衆国カリフォルニア大学バークレー校学長就任式に出席及び高等教育・研究機関の実情調査

大学間協定校（当分の間バリ第7大学に限る）との交流により学者を受入れる場合に助成金（滞在費）を交付するものである。

受 入 部 局	招 へ い 学 者 名	国 名・所 属 機 関 及 び 職 名	研 究 題 目
文 学 部	Henri GODARD	フランス・パリ第7大学 ・教授	フランス文学 第1次、第2次大戦間のフランス文学 特にセリヌ、マルロー
ウイルス研究所	KOHIYAMA, Masamichi	フランス・パリ第7大学 ・ジャック・モノー研究 所・生化学部長	生化学、分子生物学 大腸菌染色体複製の研究

## 計 報

### 上田弘一郎 名誉教授

本学名誉教授 上田弘一郎 先生は、3月23日逝去された。享年92。

先生は、昭和2年京都帝国大学を卒業、同年農学部附属演習林助手、同5年助教授を経て、同24年10月教授に昇任、同36年10月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

本学退官後は、昭和40年から同53年までの間、京都産業大学の教授に就任され、同大学の発展に寄与された。

先生の専門は、森林及び竹林に関する研究で、

特に天然林の植生型に関する研究と竹類に関する研究が著名である。後者については竹林の水防機能、竹の栄養生理、竹資源の利用開発、竹材の造林に関する研究等が最も力を注いで探求された分野であり、世界的な評価を受け、昭和37年に、日本林学会賞を受賞された。

著書には、『水害防備林』、『竹と庭』、『竹と人生』等多数あり、以上の業績等に対し、同44年には勲二等瑞宝章を授与された。

また、昭和51年には、先生自ら「日本の竹を守る会」を設立し竹類の育成と加工利用等の普及指導に務められた。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

（農学部附属演習林）



